

## 和田英作《読み了りたる物語》

## — 大正期における「読書する女性」の表象 —

まつくぼ しゅうへい

松久保 修平 (長崎県美術館)

発表  
要旨9  
時  
20  
分  
—  
10  
時松ヶ崎・東キャンパス内  
60周年記念館  
1F記念ホール

和田英作(1874-1959)が大正8年に制作した《読み了りたる物語》(松下美術館)は、同年新設されたばかりの第1回帝国美術院展覧会(帝展)に出品された。当時、東京美術学校西洋画科で教鞭を執りつつ官展審査員を務めていた和田が、名実ともにまさしく官展派の領袖であったことは自明のことであろう。文部省美術展覧会(文展)の廃止と帝国美術院の創設という美術界の転換点にあつて、和田が本作を帝国美術院の初代会員として無鑑査出品していることに鑑みれば、本作は和田研究において重要な作例と言えようが、にもかかわらずこれまで十分論じられてこなかった。本発表では、画中のモチーフの再検討から出発し、和田を取り巻く人的ネットワークを精査することによって、《読み了りたる物語》が内包する意味内容について試論を提示する。

発表ではまず、描かれたモチーフについて確認し、従来漠然と「王朝絵巻風」で、女性が読み終えた物語の内容を暗示している可能性のみが指摘されてきた画面左上の画中画が、『春日権現験記絵』の第15巻第3段、「斎宮の夢にあらわれ、神託を行う春日大明神」の場面を引用したものであることを指摘する。さらに、「読書する女性像」という本作の主題に注目し、時代背景を踏まえながら考察を進める。「読書する女性」像は、近代に入り女性の読書行為が一般化していく中で、主要な主題のひとつとして定着し、とくに初期文展において盛んに描かれたが、大正期に入るとその数は次第に減少してゆく。本作を含む同時期の官設美術展覧会に出品された「読書する女性像」を比較検討しつつ、大正期における女性の読書をめぐる状況を整理することで、「読書する女性」の表象は、明治末期から大正期はじめに大きな議論を巻き起こした、平塚らいてうらいわゆる「新しい女」のイメージと強く結びついていることを明らかにする。そして与謝野晶子、田山花袋ら文学者や、帝国劇場を介して交流のあった島村抱月ら演劇関係者など和田をとりまく豊かな人間関係を踏まえたうえで、本作に描かれた女性にもまた、「新しい女」の姿が重ねあわされている可能性を指摘したい。

本作が十分に論じられてこなかった背景には、戦後の日本近代美術史研究のなかで、モダニズム全盛の大正期にあつて官展派の作品が、創造性のない保守的なものとみなされてきたことがある。しかしながら、官展派の画家たちもまた、変化していく時代のなかで常に試行錯誤を繰り返していた。本作の研究をひとつのケーススタディとして、等閑視されがちな大正期官展派の再評価を図りたい。